

横浜みどりアップ計画市民推進会議 第61回広報・見える化部会 会議録	
日 時	令和8年2月10日
開 催 場 所	市庁舎18階共用会議室みなと5
出 席 者	大竹部会長、金井委員、河原委員、北原委員、酒井委員、飛田委員、望月委員（五十音順）
欠 席 者	なし
開 催 形 態	公開（傍聴なし）
議 題	1 市民目線での情報提供のあり方について 2 その他
議 事	（事務局） 本日は委員の皆さまにはお集まりいただき、ありがとうございます。 ただ今から、横浜みどりアップ計画市民推進会議 第61回広報・見える化部会を開催いたします。 まず、本日の会議についてご報告します。本会議は横浜みどりアップ計画市民推進会議運営要綱7条3項により、委員の半数以上の出席が成立要件となっています。本日は委員定数7名のうち、7名全員がご出席のため会議が成立していることをご報告します。 また、本会議は同要綱8条により公開となります。会議室には傍聴席、記者席を設けています。個々の発言者名を記載した会議録も公開しますので、委員の皆さまは事前にご了承ください。さらに、会議中に写真撮影を行い、ホームページや広報誌に掲載する場合がありますので、併せてご承知おきください。 次に、資料の確認です。本日の資料は、次第、資料1「市民目線での情報提供のあり方について」、補足資料として別紙のはがき大のチラシです。また、いつものように、緑のフラットファイルには本日使用するスライドと、みどりアップ計画の冊子をとじていますので、参考資料としてご活用ください。 それでは、議題に入る前に、事務局側の出席者をご紹介します。 （事務局参加者紹介） （事務局） 事務局からは以上です。 議事進行は大竹部会長にお願いします。部会長、よろしくお願いいたします。 （大竹部会長） 皆さん、あらためましておはようございます。 （一同） おはようございます。 （大竹部会長） 前回から少し時間が空いてしまいましたが、今年度も残りわずかとなりました。きょうは、この1年間を振り返りつつ、来年度に向けてさらに良い活動にしていこうため、幾つかの具

	体的な議題について皆さんと意見交換したいと考えています。情報を共有しながら進めていきたいと思いますので、本日もどうぞよろしくお願いいたします。 それでは、早速、次第1に進みたいと思います。まず、「市民目線での情報提供のあり方について」、事務局から説明をお願いいたします。 (事務局説明) (大竹部会長) ありがとうございます。 ただ今ご説明いただいた「YokohamaみどりアップActionの発信と振り返り」について、皆さんからご意見やご質問を伺いたいと思います。 今年度は、子育て世代と若者をターゲットに、「緑」と「森」というテーマに沿って取材や記事作成を行いました。委員の皆さんにはお忙しい中、協力くださり、本当にありがとうございました。 また、今年度は情報発信だけでなく、子育て世代や若者を対象とした「情報の流通のあり方」についても考える必要があるという意見を頂戴しました。その点を踏まえ、横浜市からもさまざまな情報流通の取組と数字をご紹介いただきました。 ここまでの説明を踏まえて、ご意見やご質問をあればお願いいたします。 (金井委員) 酒井委員に記事作成いただき、私も実際に取材に参加しましたが、学生の皆さんが非常に熱心に取り組んでいて、とても良い印象を持ちました。指導教授も、学生の自主性を尊重しながらしっかりと指導されていて、想像していた以上に良い取組だと感じました。 ただ問題は、以前の親子向け昆虫教室と同様、「ごく一部のみにしか知られていない」という点です。 これは質問ですが、横浜市内にある31の大学のうち、森の楽校に参加しているのは5大学ですか。 (事務局) 3大学です。 (金井委員) 学生リーダーの方に伺うと、「他大学との交流があったほうが良い」という声がありました。これは酒井委員も指摘されていきました。指導教授もおっしゃっていたように、交流がないのは非常に残念だと思います。 事務局の所管外かもしれませんが、横浜市として、オンラインと対面を組み合わせ、今回の取組の振り返りをするなど、大学間の交流を実施するとよいのではないかと感じます。 また、以前から申し上げているように、「みどり税を使って緑を増やす」という取組は世界的に見ても先進的なものですから、担当の皆さんには、もっと自信を持って進めたいと思います。大変もったいないと感じています。 「みどり税の廃止」という意見も聞かれますが、この取組が広く知られていれば、恥ずかしくてとてもそんなことは言えないはずです。党派性の話ではなく、「みどり税に反対するのですか」と周囲がたしなめるくらいの雰囲気になってほしいと思います。私は、特にその点を強化していきたいです。 もう一点気になったのは、noteの閲覧数です。どう考えて
--	--

	も閲覧数が少ないと感じます。100万回とは言いませんが、せめて10万回程度は目指してほしいと思います。 素人の意見で恐縮ですが、根本的にやり方に課題があるのではないかと感じています。他の自治体のnoteで閲覧数が10万回、20万回に達している例がありますか。もし、あるのならば、成功している自治体には必ず理由があるはずだと考えますので、そこをぜひ調べてほしいと思います。 われわれは5年間この取組に関わりますが、このままでは「1万回を超えてよかった」というレベルにとどまってしまうのではないかと感じています。それは非常にもったいないです。
(大竹部会長)	横浜市民は377万人ですからね。
(金井委員)	そうです。やっていること自体は間違っていないのですが、もう少し一般の市民の方に知っていただく必要があると思います。全員は難しいとしても、せめて2、3割の方が「よく知っているよ」と言ってくれるレベルにしないと、もったいないと感じています。長くなりましたが、以上です。
(事務局)	1点目の、森の楽校に参加している大学同士の情報共有ですが、大学間で親和性の高い授業があり、オンラインなど対面で会わなくても情報を共有できる手段があると思います。そうした手段も活用しながら情報共有を進め、周知され、広がっていくことが大切だと考えています。
(金井委員)	ぜひ、よろしくお願いします。
(事務局)	また、情報発信の方法についてですが、行政としてもさまざまな発信手段があります。市全体の広報の方針も含め、具体的にどこまで目標数値を設定できるかは分かりませんが、「どの程度を目指すのか」という点も含めて検討していければと思っています。 皆さんから多くのヒントをいただいていますので、それを踏まえ、市民の皆さんにしっかり伝わるようにすることがわれわれの使命だと考えています。引き続き、その点を進めていきたいと思っています。
(飛田委員)	先日取材で横浜国大に伺い、参加されていた保護者の方々にお話を聞きました。「このイベントをどうやって知ったのですか」と尋ねたところ、「学校で毎回、案内があるので、その都度、応募しています。とても人気で、3回目の応募でようやく当たりました」というような方が何人もいました。 その話を知人にしたところ、「それは横浜国大付属小学校の話だと思う」と言われ、「なるほど」と思いました。つまり、森の楽校の情報流通は、横浜国大の教育学部関係の内部で回っていたわけです。そうすると、大学周辺にあるほかの小学校の子どもたちは参加しづらい状況になります。 毎回申し上げている気もしますが、教育委員会にももう少し協力をお願いすることが、皆にとって良い方向につながるのではないかと感じています。これが1点目です。 2点目は全体の情報流通についてです。先々週、東京都がネイチャーポジティブに貢献した企業を表彰するイベントを行っていました。ネイチャーポジティブ自体が新しい概念なので、今年で2回目だそうです。丸の内に本社を置くよう

	な大手企業が受賞し、東京都の環境保全や絶滅危惧種の保全に貢献したことが紹介されていました。 このイベントの広報は東京都が行っていましたが、それに加えて、環境コンサルティング等、関係者のネットワークを通じて、さまざまなルートから情報が広がっていました。私も、「授賞式がある」という情報が、さまざまなルートから入ってきました。授賞式はオンラインでも視聴できるようになっていました。 行政として難しい部分もあるかもしれませんが、広報を行う際には、関係する民間企業、財団法人、NGO、NPOなどに情報提供や拡散をお願いするといった方法を検討したほうがよいと思います。 これは東京都の例であり一概に比較はできません。しかし、それをまねできる自治体は、日本国内には横浜市しかないと感じています。 (事務局) 1件目の森の楽校のイベントの周知については、私の個人的な経験ですが、東京都市大のイベントに2年連続して申し込んだのですが、2回とも天候が悪く参加できませんでした。私がそのイベントを知ったきっかけは、子どもが学校から持ち帰ったチラシでした。 大学ごとに状況は異なると思いますが、近隣の小学校とつながりがあって情報が回っているのだろうと考えます。 また、先ほどのご意見にもありましたが、どのような周知方法を行っているのかという点も含め、大学間で連携して取組を進めることで、「これが効果的だった」という情報交換も可能になると思います。その意味でも大学間の連携は重要な視点だと感じています。今後、その観点でも進められないか検討していきたいと思います。 2件目は、ご紹介くださった東京都の事例は民間企業を活用して広報しているというお話でした。横浜市のみどりアップ計画についても、民間企業等の方々とも連携しながら取組を進めています。民間の方々と一緒に緑を守るという取組ですから、いわばステークホルダーの皆さまとしっかり連携し、それぞれの媒体を活用することによって、行政だけの発信ではなく、各ステークホルダーがハブとなってさらに広範囲に発信できると考えます。 現在関わりのある企業様はもちろん、それ以外にもしっかりと広げられるよう、さらに力を入れて周知していきたいと思います。 なお、東京都は「東京グリーンビズ」など、行政としての発信やプロモーションが非常にうまい印象があります。そうした事例も参考にしていきたいと考えています。 (大竹部会長) ありがとうございます。他の皆さんはいかがですか。 (北原委員) 今年度の最初の部会で、情報流通についてしっかり考えてほしいと申し上げましたが、その後の丁寧な取組を拝見し、とても感銘を受けています。また、LINEが有効であることも分かってきました。しかし、毎回LINEを使えるわけではないので、年に1回使えるのであれば、その効果を最大化できるように、場面を見極めて活用していただけるとよいと感じています。 先ほど、金井委員からPVが少な過ぎるというお話がありましたが、これは今の時代では致し方ない面もあると思います。
--	---

	す。私たちも横浜市さんのさまざまな発信媒体のお手伝いをしていますが、現在は情報が多過ぎて「届けるのが難しい」、「見つけてもらうのが難しい」という本質的構造があるように感じます。つまり、ネットに流せば必ず届くという時代ではなくなっているのです。 情報のアップロード自体は簡単になった反面、「届けること」が各段に難しい時代になりました。その前提に立って、「最も効果的な媒体は何か」を常にアップデートしていく必要があると思います。 また、飛田委員からご提案がありましたが、情報流通のルートを広げるためには、人海戦術でネットワークを集めていく必要があると感じています。ただし、市民団体や企業のネットワークなど、横のつながりを活用する際には、内容と企業の活動のマッチングが重要です。 何でもかんでも「協力してください」とお願いしても、「なぜそれをやる必要があるのか」、「どんなメリットがあるのか」という判断が生じます。また、人手が掛かるということはコストもかかります。そのため、企業や団体が掲げるビジョン・ミッションとどう合致するのか、効果があるのかといった点を丁寧に整理しながら進めないと、協力を得るのは難しい時代だと思います。 一方で、緑や花に関わる団体・企業の活動が理解されることは相互理解や共感につながります。情報流通のルートづくりは手間の掛かる作業ですが、相利関係を考えながら、密にコミュニケーションを取っていくことが重要だと感じています。 それから、来年度に向けてですが、教育委員会を通じた子ども・若者への発信が効果的ではないかという意見が複数出ています。そこで、教育委員会に対して「どのような内容であれば、どの程度の頻度で発信への協力が可能か」をヒアリングしたほうがよいのではないかと思います。やみくもに依頼しても、業務量や働き方改革の観点から限界がありますし、効果的なタイミングと手法を見極めるためにも、相手の状況を理解することが大切です。協力しやすい企画やタイミングについて整理しておけば、今後の更新時にも役立つのではないかと思います。 (大竹部会長) ありがとうございます。 (事務局) 1点目の「相利」については、まさに行政が最も苦手としている部分です。そのため、委員の皆さまから忌憚のないご意見を頂戴し、どのような視点で民間企業の方々と連携していくべきか検討していければと考えています。 また、教育委員会への提案・要望については、これまでの取り組みに加え、今回のご意見を踏まえ、どのような連携ができるのか、何が効果的なのかという点をさらに検討していきたいと考えています。 (大竹部会長) ありがとうございます。他の方はいかがですか。 (河原委員) 横浜市のLINEは本当に効果が高いことがよく分かりました。私はXも利用していますが、情報が流れてしまうため探すのが大変です。横浜市のLINEに登録すれば、毎日、さまざまな情報が区からも届きます。横浜市のLINEを通じた発信が年に1回だけだとしても、例えば、先日記事にした大岡川の
--	--

	ある南区や柴シーサイド恵みの里のある金沢区の広報担当の方に、「今回のnoteの情報を必ず掲載してください」と依頼することはできないでしょうか。自分の区の記事であれば読んでみようという方は増えるでしょうし、森の楽校を実施した横浜国大のある保土ケ谷区の近くの小学校の保護者など、「知らなかった」という人にも届くと思います。そうすれば、18区を通じて18回の発信ができるのではないかと思います。 また、noteであれば、大学生にも閲覧される機会が増えるのではないかと感じています。 そして、大学生との横のつながりができれば理想ですが、もし難しい場合には、森の楽校やみどりアップの事業に関わっている大学の学生に、年に1回程度、この部会を後方で傍聴してもらう機会をつくってはいかがでしょうか。傍聴する学生が1人、2人と増えてつながりが生まれるかもしれません。費用をかけずに私たちの活動を知ってもらう意味でも、学生さんに部会を傍聴してもらうのはいい方法だと思います。 教育委員会については、私も何度か協力をお願いしましたが、非常にお忙しい印象を持ちました。教育委員会経由ではうまくいかなかったとき、区の担当者を通じて直接、校長先生へのメールお願いしたところ、区内の校長先生全員に情報を届けることができました。こうした取組を18区で1回ずつ行えば、市域全体をカバーできるのではないかと感じています。横浜市には約350校の小学校があるようですが、うまくいけば、今回作成するポストカードも子どもたちに届き、その保護者の目に触れる機会も増えると思います。 今ある仕組みに一工夫加えるだけで、できることはもっとあるのではないかと感じています。もちろん、区の縦割り等の関係で難しい部分もあるかもしれませんが。
(金井委員)	でも、いろいろと試してみたほうがいいですね。
(河原委員)	不審者情報ばかり届きますが、私は違う区のイベント情報を見て、そのイベントに参加することもあります。LINEは情報を見返しやすいので、記事として読んでもらうには情報が常に流れてしまいがちなXよりも、ターゲットに届きやすいのではないかと思います。 フォロワー数が14人では少し寂しく感じます。せっかく取組を進めているのに、ここにいる人数とほぼ同じですからね。
(金井委員)	これから申し上げることは、広報担当の市民委員の役割を逸脱していると言われればそれまでですが、委員は6人います。横浜市内には大学キャンパスが31あるのに、参加しているのは3校だけです。例えば、酒井委員の大学は参加していますか。
(酒井委員)	参加しています。
(金井委員)	それはよいですね。そうであれば、私たち一人一人が1校でも2校でもアプローチしてみることも一つの方法ではないかと思います。もちろん、「やり過ぎだ」ということであれば無理にとは言いませんが、そのくらいしないと参加大学は増えないのではないかと感じています。

	各大学は上層から「地域との交流を深めるように」と言われているはずですが。みどりアップ計画についても単に「知らないだけ」だと思うのです。従って、もし許されるのならば、できる範囲でアプローチしてみてもよいのではないかと考えます。
(大竹部会長)	その辺りはいかがでしょうか。
(事務局)	いまやっていることをもう一工夫することでより効果的に発信できるのではという意見をいただきました。しっかり取組を進めている大学もありますので、そうした取組を情報発信により共有していきたいと考えています。 また、区とは情報共有の機会もありますので、「こうした情報発信を行っています」とお伝えし、関連する情報発信に組み込んでもらえるよう働き掛けをし、できる限り進めていきます。
(大竹部会長)	大学へのアプローチなど、いわゆる営業的な動きは可能ですか。
(金井委員)	大竹部会長はなさりたいですね。
(大竹部会長)	非常にやってみたいですね。得意分野です。
(河原委員)	私も一緒に行ってみたいですね。
(金井委員)	今のご時世だから、大学も決して門前払いにはしないと思います。それなりのルートをたどれば、話は聞いてもらえるはずですが。
(河原委員)	農業のお手伝いをしてくれる大学生が増えているという話も聞きます。
(金井委員)	本当に多いのです。
(河原委員)	大学のサークル活動の一環で、農家の代わりにマルシェで販売を手伝う学生もいます。
(金井委員)	確かにいますね。
(河原委員)	大学にアタックするのはいい方法だと思います。
(金井委員)	結局、「知らないだけ」ですから、みどりアップ計画の存在を知れば、興味を持つ学生は多いはずです。
(飛田委員)	先日の森の楽校では、都市計画専攻の学生さん2名とお話しする機会がありました。そこで、「実は『みどりアップ計画』というものがあり、私たちは市民の目線で情報を伝える役割を担っています」と説明したところ、「そんな組織があるんですか」という反応でした。「みどりアップ計画には最初からそういう仕組みがあるんです」と話したところ「どうやったら参加できるんですか」と、とても興味を持ってくれました。 「きょう取材している酒井さんも、応募して委員になっているんですよ」と伝えると、「次回は私たちも絶対応募します」と、強い熱意を示してくれました。

	(金井委員) 熱意が感じられましたよね。 (飛田委員) 本当にあふれる熱意を感じました。 従って、先ほどのお話にあったように、この部会に学生さんを招待して、社会見学のような形でこうした取組を見てもらおうとよいと考えます。そして、部会後に学生さんたち同士で自己紹介をし、LINEを交換するような形でつながりが生まれ、コミュニティができれば、次の展開につながるのではないかと感じています。もしかすると、これが一番簡単な方法かもしれません。 ただし、傍聴席には記者クラブに登録しているマスメディアのみということであれば、それは難しいかもしれません。 (事務局) 傍聴席には人数制限はありますが、学生さんの傍聴はもちろん可能です。ただし、オブザーバーとしての参加ですから、発言はできません。 確かに、「こういう取組が行われているのにあまり活用されていない」といった話を実際に聞いていただくほうが、公開された会議録を読むよりも伝わりやすいかもしれません。 もし、学生さんへのつてなどがあり、学生さんに傍聴に来ていただけるのであれば、それはとてもありがたいと思います。 (大竹部会長) 他の委員はいかがですか。 (酒井委員) 幾つか質問があります。まず、アクセス数の推移を見ると、9,000以上の閲覧数がある一方で、フォロワーは14人という状況です。今後増えていくとは思いますが、具体的にどんな人がアクセスしているのかが、もう少し見えるとよいと感じています。 YOKOHAMA GO GEEN (X) を見たところ、本当に多種多様な投稿がありました。InstagramやYouTubeショートなど映像媒体が多い中で、2,000字近いnoteの記事を読むのは、かなりハードルが高いと感じています。従って、noteにアクセスしている層を明らかにして、明確なゴールを設定すれば、noteを書く側も取り組みやすいと思います。そうした点を少しクリアにしてくださるとありがたいです。 (事務局) まず、それぞれの媒体でどのような人が閲覧しているのかについては、われわれも不勉強な部分がありますが、どのツールで何が把握できるのか、確認し、把握できるものはしっかり把握した上で共有しながら進めていくことが効果的な広報につながると思います。 そうした視点で、今後検証を進めていきたいと考えています。 (大竹部会長) ありがとうございます。他の委員はいかがですか。 きょうはさまざまな意見が出ましたので、事務局でぜひご検討をお願いします。私たちも、この活動はとても良い取組だと考えて参加していますし、「みどりアップ計画市民推進会議委員」という肩書を使って動きやすくなる場面も多いと思います。そして、そのことが横浜市の職員の皆さんをお手伝いすることにもつながるのではないかと感じています。 高校生を例にとれば、今は受験制度や就職活動のあり方が
--	---

	変化し、「学生時代に何をしたか」という点が重視されるようになっていますが、学生の中でも積極的に動く子と何も知らないまま学生時代を終えてしまう子との二極化が起きています。 こうした活動に関わる、あるいは、ボランティアを経験した子どもたちは、将来横浜市を担う人材になり、「自分たちもこの活動を大事にしなければ」と感じるはずです。そして、みどりアップ計画の理解者になってくれると思います。 従って、そういった面でも、大学生や高校生をどう巻き込むかは非常に重要だと考えています。われわれにできることがあれば、ぜひ動きたいと思いますので、そうした点についても事務局でご検討くださるとうれしいです。 それでは、次の議題に移ります。チラシについてのご説明をお願いいたします。 (事務局説明) (大竹部会長) ありがとうございます。 それでは、皆さんからチラシについてのご意見やご質問を伺いたいと思います。まず、デザインついてはいかがですか。 (金井委員) NGと言う人はいないでしょう。 (大竹部会長) OKと言う方が多いと思いますが、さらに追加のポジティブな要素があれば、市民の皆さんにも喜んでいただけるのではないかと感じています。 (河原委員) 前回も申し上げましたが、山からつながってみなとみらいが見える、横浜らしい構図が入ったのでとても分かりやすいです。 (金井委員) これはもらった人もうれしくなると思います。 (大竹部会長) 単にチラシを配布するだけではなく、「横浜には森があって、田んぼがあって…」というように、このデザインの背景の物語を説明できると、もっと広がりが出るのではないかと感じます。もらった人も、「そういう意味があるのか」と理解できれば、深く印象に残るように思います。 このデザイン自体はとてもすてきだと思います。 他の委員はいかがですか。 (北原委員) 私は校正を細かく見させていただいたのですが、印刷の基本である裁ち落としの幅が1ミリあるかないかのため、もう少し内側に余白があるほうが安心だと思います。 また、校正の段階でも指摘しましたが、余白のラインが縦方向にしっかりそろっていることは大変重要です。裏面を見ると、「つながる想い、育つ緑、横浜みどり税」のラインに対して、問い合わせフォーム外側の白い余白のラインは右に寄っているように見えます。 印刷物をきれいに见せるポイントは、左右・上下の余白がそろっていることです。これはクオリティを担保する上でとても大事な点なので、デザイナーさんには最後の仕上げとして、表面・裏面、上下・左右の余白の統一をお願いしたいと思います。本当に最終調整の部分です。
--	---

	(大竹部会長) さすがですね。デザイン面で他に何かありますか。それでは、もう一点、配布スケジュールについて何か意見、ご質問はありますか。 (飛田委員) 7,200枚という数字は、予算上の制約ですか。 (事務局) 予算の関係で、予算内でできる限り印刷できる枚数です。 (飛田委員) 分かりました。もう一つ、配布予定場所にウェルカムセンターが入っていないようです。 (事務局) みどりアップ計画の活動に関係する部署は、ウェルカムセンターも含めて配布していきます。 (飛田委員) 先ほどの「イラストの背景の物語があったほうがよい」という点については、難しいかもしれないのですが、例えば、相鉄の「そうにゃん」は絵本シリーズがどんどん展開され、今では小田急の「もころん」など、他社がまねをするほど広がっています。それと同じく、このチラシから絵本が生まれるような展開があればよいのではないかと思います。ただし、お金がかかりそうですね。 または、「このデザインを題材に市民から作品を募集する」といったコンクール形式も考えられると思います。でも、それも費用がかかりそうです。 相鉄の「そうにゃん」は大ヒットし、小田急の「もころん」も人気があるなと感じます。 (河原委員) ChatGPTで「横浜みどりアップ葉っぱー」を読み込ませてしゃべらせることはできないのでしょうか。そうすれば無料でできそうだなと思います。 「森があって、田んぼもあって、野菜も作っているんだよ。イベントにも来てね」といったように、どこかを押すと少しずつしゃべるような仕組みがあれば面白いと思います。 その機能をチラシに実装するには費用がかかりますが、Instagramへ飛ばして、そこにしゃべる仕組みがあれば可能かもしれません。ChatGPTではそこまでできないのでしょうか。 せっかくかわいい「横浜みどりアップ葉っぱー」がいるので、この子にしゃべらせてはいかがですか。それをInstagramに載せれば、それだけでもコンテンツが増えます。 (大竹部会長) 7,200枚は、横浜市の人口に対して何パーセントなのかを考えると、どこでどう使うかは重要です。 (飛田委員) 委員に「1人10枚」と言われても、「誰に配るのか。ちょっと待てよ」と思ってしまう。 (河原委員) 私はマルシェがあるので、そこで配ろうかと思ったのですが、7,200枚しかないとなると、少しもったいない気がします。 (金井委員) 100枚くらいは持っていったほうがいいですよ。 (河原委員) でも、7,200枚しかないですからね。
--	--

	(北原委員) 部会で「どこに配布したか」をきちんと報告し、事務局で配布枚数や最終配布先を整理しておくとういと思います。一度デザインを作ってしまうと、増刷はそこまで大変ではないため、来期の予算を確保することを考慮すればよいと思います。われわれ委員としても、どこに配布したかをしっかり記録して、フィードバックするようにしましょう。 (大竹部会長) そうですね。 (河原委員) これをそのまま配ってもよいのですが、この印刷データをPDFファイルにして小学校へ送付し、「必要な分だけ印刷して配ってください」という形にすれば、紙の無駄も出ないと思います。 (北原委員) その場合はすぐ一冊での配信でしょうか。恐らく、学校側では印刷して配布するところまでは対応してもらえないと思います。 (河原委員) そうすれば子どもたちにも渡ると思います。 (金井委員) さまざまな方法を使って、有効に活用したいですね。 質問ですが、例えば、家族で「この森へ行ってみよう」、「この公園へ行きたい」と思ったとき、横浜市としての「あなたの近くのお勧めの公園」がパッと見られるような仕組みはあるのですか。 積極的な人は自分で調べると思うのですが、そうでない人は情報が限られてしまいますよね。 この前、酒井委員と参加した森の楽校でも、話していて「寺家ふるさと村の存在すら知らない」という学生さんがいました。私は近くにあるため知っていますが、「全く聞いたことがない」と言うのです。意外と知られていないものですね。 (大竹部会長) 学生さんは知らないですね。 (金井委員) 少しもったいないと感じました。 (河原委員) やっぱり「横浜みどりアップ葉っぱ」にしゃべらせたほうがいいのかもかもしれません。 (大竹部会長) 他の皆さんはいかがですか。配布についてのご意見はありますか。 (望月委員) 単に技術的な話になりますが、これははがきサイズですか。 (事務局) そうです。 (望月委員) そうであれば、PDFファイルをアップロードして、必要に応じてダウンロードできるようにすればよいと思います。 今は自宅にカラーコピー機のある所が多いため、「ここからダウンロードしてください」と案内すれば、7,200枚という上限に縛られず、「皆さんそれぞれ、手弁当でお願いします」という形も可能です。横浜市民は360万人程度ですか。 (事務局) はい。
--	---

	(望月委員) できるだけ多くの市民が利用できる方向を考えたほうがよいと思われます。7,200枚しかないため、「配れない」状況になって市民から「ではどうすればいいのか」と言われたときに困ってしまいます。 その点、「ダウンロードできます。ご自宅のコピー機で印刷してご利用ください」と案内できれば、その状況に対応できますから、ぜひご検討ください。
	(事務局) ありがとうございます。
	(大竹部会長) ありがとうございます。他の委員はいかがですか。
	(金井委員) このチラシはそのまま貼ると小さいようですが、区役所で掲示する予定はありますか。
	(事務局) 今のところ、区役所での掲示は検討していません。
	(金井委員) 私も全て見ているわけではありませんが、区役所のさまざまな掲示物の中に「みどりアップ」という文字を見た記憶がないのです。 もちろん費用との兼ね合いもあると思いますが、区役所では市民の皆さんは暇つぶしに掲示物をよく見えていますから、もう少し目に触れるようにしたほうがよいと思います。これは今回のチラシだけでなく、全般的な話です。
	(河原委員) でも、区役所には、よく見るとみどりアップ計画の掲示がありますよ。
	(金井委員) ありますか。
	(河原委員) はい。区役所のモニターには、みどりアップの内容がずっと流れています。
	(金井委員) そうですか。全く見ていませんでした。ぼーっとしていたのかもしれませんが。
	(河原委員) 私は「みどりアップ」が何かを分かっているので気付きますが、みどりアップ計画を知らない人は気付かないかもしれません。モニターには「みどり税」という言葉は出ていませんでしたが、みどりアップ計画の情報は流れているようです。
	(金井委員) そうですか。それは失礼しました。
	(望月委員) 「今月はみどりアップ計画の推奨月間です」といった案内をする、プッシュ月間もあります。
	(金井委員) そうなのですね。
	(大竹部会長) つまり、ふらっと区役所を訪れた人やみどりアップ計画に興味のない人は全く気付いていないということですね。
	(金井委員) そうです。

	(大竹部会長) その点はどうしたらよいかを考えていかなければいけませんね。また、チラシのダウンロードの案は私もよいと思います。
	(金井委員) それはよいですね。
	(大竹部会長) このチラシがどこで使われるのかを考えてみると、保育園、幼稚園、学童クラブやキッズクラブなど、そういった施設でよく使われるのではないかと思います。
	(河原委員) 小学校の総合学習では、「横浜の食」や「横浜の農」をテーマにすることも多いです。このチラシは5年生には少し合わないかもしれませんが、3年生にとってはこれから横浜の地産地消を学ぶ際にとても良い教材になると思います。そのため、ダウンロードできるようにすることは大変よいと思います。
	(大竹部会長) 「チラシの使い方」について簡単に付記しておく、子どもに関わる方々がダウンロードして使ってくれることがより期待できるのではないかと思います。
	(望月委員) これは塗り絵になるのですよね。
	(事務局) 塗り絵になります。
	(望月委員) そうあれば、ダウンロード画面の下に「こうして塗り絵として使えます」といった添え書きをしてアップロードしておけば、先ほどのお話のように、幼稚園の先生方などが見てくれると思います。
	(事務局) そうですね。
	(大竹部会長) さまざまな先生方もご覧になるかもしれませんね。
	(望月委員) 本当に簡単な使い方だけでよいので、そういう形にしたほうがよいと思います。
	(大竹部会長) 他にご意見はありますか。それでは、次の議題に移りたいと思います。 次は「次年度の広報について」ということで、事務局からご説明をお願いしたいと思います。
	(大竹部会長) ありがとうございます。 ここからは委員の皆さんと意見交換を進めていきたいと思っています。先ほどご案内があったとおり、来年度の広報・見える化部会の活動として、共同取材と個別取材とがあります。きょうは、個別取材のテーマと担当者を決めてほしいというご依頼を受けました、まずは、「誰がどのテーマを担当するか」を決めたいと思います。 その後、共同取材の記事テーマとして事務局からご提案された内容について、皆さんからご意見を伺いたいと考えています。 まず、スライドの21ページのとおり、各委員は共同取材1回、個別取材1回を実施し、その取材に基づき、noteの記事を更新するというものです。そのうち、個別取材の柱1・柱

	2・柱3について、誰が担当するかを決めたいと思います。具体的なテーマについては、担当する委員が、5月の次回部会で、取材したいテーマに関するアイデアを発表してもらえるとよいというお話でした。 以上の点を踏まえ、まずは、「個別取材ではどの柱を担当したいか」について、皆様のご希望を伺いたいと思います。もう心に決めている方もいらっしゃるかもしれませんが、いかがですか。
(北原委員)	農関係については、農業振興課さんが現在ちょうど発信準備をされている内容と、個別取材のテーマが重なる可能性が高いと思います。そのため、事前に提案内容を調整したほうがいいのではないかと感じています。せっかくにプロが作り込んだ情報があるのに、それと重複したnoteの記事を作成するのは大変もったいないと思います。 みどり環境局全体で発信している内容を精査した上で、「委員だからこそできること」を大事にできればよいのではないかと思います。
(金井委員)	個別取材はパスできないのですよね。
(大竹部会長)	パスというのはどういう意味ですか。
(金井委員)	いや、少し面倒くさいと思ってしまいました。ただし、「やれ」と言われれば、もちろんやります。 どうしてもということであれば、寺家ふるさと村の中にあるJIKE STUDIOについて取り上げたいと考えています。農地にある柿の木を守るため新規就農したりクラウドファンディングしたりしている方です。取材テーマとしては面白いのではないかと思います。
(大竹部会長)	金井委員の取材テーマについてはいかがですか。
(事務局)	個別取材のテーマは、みどりアップ計画に関連する取組に関連したものです。JIKE STUDIOの活動は、独自のクラウドファンディングで畑を取得するというものであり、恐らく、みどりアップ計画とは直接、関係ないように思います。
(金井委員)	なるほど、そうですか。 しかし、彼女は顔が広いので、みどりアップ計画に関連する取組についても、いろいろご存じだと思いますから、その方向で取材してもよいかもしれません。
(事務局)	寺家ふるさと村関連でいうと、2つのふるさと村の共通課題として、施設の老朽化や担い手不足があります。そのため、寺家ふるさと村をどうしていくかということを農政主体で検討していますので、そういったテーマも考えられるかと思います。
(金井委員)	JIKE STUDIOにこだわっているわけではなく、寺家ふるさと村関連でということです。
(飛田委員)	今年、横濱ワイナリーで、今宿のワイン畑で採れたブドウを使った初めての横浜産ワインが商品化されました。もし、それがみどりアップ計画に関連しているのであれば、ぜひ取

	り上げたいと思っています。 ワインはテロワールでストーリーがとても長くなってしまったため、noteに長めの記事としてアップロードしてもよいのではないかと考えます。 ただし、それがみどりアップ計画に関係しているかどうかは分かりませんが、私は、個人的に横浜ワインをずっと追ってきて、自分のブログにも書いているため、もし取り上げることができればとてもうれしく感じています。
(事務局)	申し訳ありませんが、即答できないため、お調べしてお伝えします。
(金井委員)	みどりアップ計画に関係しているかどうかの基準はどこですか。「緑をアップする」という広い意味ではどれも該当しように思えるのですが、基準は市が直接関与しているかどうかということですか。
(事務局)	みどりアップ計画に位置付けられている事業が対象になります。
(河原委員)	横濱ワイナリーの町田さんは「はまふうどコンシェルジュ」であり、地産地消ビジネス創出支援事業で横濱ワイナリーが取り上げられている可能性はあります。ただし、今の段階では、みどりアップ計画の事業に含まれているかどうかは分かりません。
(飛田委員)	「はまふうどコンシェルジュ」関係でみどりアップとどうつながるかでしょうか。
(河原委員)	町田さんは「はまふうどコンシェルジュ」の同期ですよ。
(飛田委員)	それこそ河原委員が取材されるとよいのではないですか。
(河原委員)	今までは市外のぶどう畑のワインを出していましたが、今年初めて「横浜のワイン」ができました。 川崎市は昨年「川崎のブドウのワイン」としてCMをしていて、明治大学の学生もその営業活動に関わっています。やはり大学生はSNSで一気に拡散するなど、広報が大変上手です。それを見ると、正直に言えばくやしいです。
(金井委員)	森の楽校も、大学生にもっと自由にやらしてもらえば、全然違うのではないかと思います。
(河原委員)	そうであれば、大学生の活動を掘り下げて町田さんにつながるような取材でないと、町田さんの話だけだと横濱ワイナリーの宣伝のようになってしまう気がします。私も横濱ワイナリーを応援していますが、取材としてはもう少し工夫が必要だと思います。 他にも、大学生が関わっている農家さんが数多くあり、大学卒業後にそのまま農業に従事した人もいます。そういう若い世代を取材するほうが面白くなるのではないかと思います。私も大学生を取材してみたいです。せっかく「若者」や「子育て世代」がキーワードなので、個別取材もその視点を生かせるとよいのではないかと思います。

	(大竹部会長) そうですね。「農×若者」とか「農×緑」といった切り口でターゲットを絞るのも、確かに面白いかもしれません。
	(飛田委員) もう一つ、これは身内から聞いた話で確実ではないのですが、まさかりが淵市民の森の話です。最初にまさかりが淵を市民の森にされた地主さんが高齢化して、今まで一緒に活動してきた仲間も80歳を超えて愛護会を辞めようとしていたそうです。そのとき、その地域に新しく越してきた40～50代の方々が、「辞めるんですか。では、私たちが引き継ぎます」と申し出てくれ、愛護会がほぼ総入れ替え状態になって、一気に若返ったそうです。 そうした事例を、何らかの形で取り上げるとよいのではないかと思います。
	(北原委員) きょうは取材テーマの詳細まで議論するのですか。委員の担当する分野を決めるのですよね。
	(大竹部会長) そうです。きょうは、例えば「農の担当」「緑の担当」といった形で担当を決めます。具体的なテーマについては次回決めることになると思います。 ただし、テーマについては大前提として「ここまではOKだけど、これはNG」といった線引きがあるはずなので、その範囲を事務局から示してくださったほうが、委員の皆さんもアイデアを考えやすいと思います。
	(北原委員) 下にあるパブリックな取材対象を見ると、個別企業の利益に直結する内容は取材しにくいですし、仮に取材しても、書き方に対する校正が多く入る可能性があります。そうなる、皆さんが書きたい内容にならない場合があります。 そうした点を踏まえると、ここに挙げられている事業の中で関心のあるものや、「大学生が関わるテーマにしたい」といった方向性をまず示し、その上で、「では、こういうテーマがあります」と事務局から提案していただくのが、一番スムーズではないかと思っています。
	(大竹部会長) 確かに、このテーマでやりたいと思っても、具体的にどれを扱えばいいかというアイデアは、横浜市さんが持ってらっしゃいそうですね。
	(北原委員) 今、飛田委員がおっしゃったような、若い世代が自ら愛護会を立ち上げてというものは、ストーリーとしてとても良いと思いますが、JIKE STUDIOは難しいだろうと私も考えます。行政の発信をお手伝いする立場から見ると、この媒体では扱いにくいだろうなと感じます。 方向性としては、市民の森であったり、農であれば恵みの里や、はまふうどコンシェルジュの活動の中でも不特定多数が参加できるマルシェなど、そういったものがテーマに適しているのではないかと思います。
	(金井委員) 寺家ふるさと村に関することでもよいのですよね。行政と絡んでいたら駄目ということではないのですよね。
	(大竹部会長) そこは大丈夫ですよね。
	(事務局) 大丈夫です。

	(金井委員) どうしてもやりたいわけではないのですが、各自必ず取材するということならば、寺家ふるさと村が一番身近だと思います。 (大竹部会長) 「森・農・緑」という3つの柱のうち、どれを担当するか、ということになるかと思います。寺家ふるさと村は、いろいろな切り口がありますからね。 (金井委員) 「森・農・緑」の全部がありますね。 (大竹部会長) 森をテーマにしても、緑をテーマにしてもいいですね。金井委員のように、「これをやりたいです」という方はいらっしゃいますか。 (河原委員) くどいのですが、農でも緑でも、大学生が絡んだテーマが面白いと思います。森ならば、この間、森の楽校へ行きましたよね。 (大竹部会長) そうですね。 (河原委員) 学生が関わっている農や緑の事例はたくさんありますか。神奈川大学とマルシェをやったりしていますよね。 (大竹部会長) 神奈川大学とどこですか。 (河原委員) 横浜市です。 (大竹部会長) そうなのですね。 (河原委員) 高島中央公園のみなとみらい農家朝市の取組としてやっていました。今はやっていないかもしれません。 (大竹部会長) どのように決めますか。 (飛田委員) 私はどれでもいいです。 (河原委員) 私もどれでもいいです。若者をテーマにしたものは面白そうなのでやってみたいですね。 (飛田委員) 来年度が無理なら再来年度でもいいのですが、テーマについて提案があります。精神障害のある方や刑期を終えて社会に戻ってきた方々を、公園の整備などに受け入れる活動をしている方が戸塚におられます。みどりアップ計画でその活動を支援しているかどうかは分かりませんが、少なくとも「公益財団法人かながわトラストみどり財団」からは一定のサポートを受けているとのこと。もしみどりアップ計画の支援を受けているのであれば、こういった活動もみどりアップに貢献しているということ、noteの長い記事として取り上げてみたいと考えています。 中心となって活動されている方は不登校を経験し、10代で警察のお世話になったこともあり、そこから立ち直ったという人生のストーリーを持つ方です。まだ30代前半の方ですが、その方を支えてきた70代の方からお話を聞きました。 そうした事例を横浜市さんに取り上げてもらえると、みど
--	--

	りアップ計画の意味が別の角度からも伝わるのではないかと思います
(北原委員)	確認ですが、この共同取材は、望月先生以外の6人の委員が2つのグループに分かれると理解してよいですか。その他に個別取材がある、ということですか。
(大竹部会長)	共同取材は2人から3人のグループですね。
(北原委員)	「1人当たりの取材回数2回」というのはどういう意味ですか。
(事務局)	共同取材を1回と個別取材を1回の両方に参加していただくという意味です。
(北原委員)	それでは、個別取材は6人全員が行うのですか。
(金井委員)	委員それぞれが行うということですよ。
(大竹部会長)	個別取材は2人ずつのペアになって行います。
(北原委員)	2人ずつですか。
(大竹部会長)	そうです。どのように決めましょうか。
(河原委員)	難しいですね。
(北原委員)	テーマがあって、「花でやります」「森でやります」「農でやります」という感じですよ。
(大竹部会長)	皆さん、何でもいいですか。
(金井委員)	ペアで取材するのならば大丈夫だと思いますが、例えば、酒井委員にはどなたかと組んで、森の楽校をずっと追いかけてみてはどうでしょうか。次は彼の大学がいいのではないかと勝手に思っています。
(望月委員)	自分の大学はなかなかやりにくいかもしれませんね。
(北原委員)	漠然とし過ぎて決めるのは難しいですよ。私は年間、相当数の取材をしているため、本当に何でもよいです。
(金井委員)	きょう、結論を出すのは難しいのではないですか。
(大竹部会長)	そうですね。そう考えると、次の「記事テーマについての意見」とリンクしてくると思います。例えば、継続的に森の楽校を特に若者に広げたいのであれば、関わる大学数を増やす、認知度を上げるなど、そういった方向性が出てきます。そして、共同取材に森の楽校が入らない場合は個別取材で必ず扱うという形になるかもしれません。 共同取材のテーマとして、現在は森の楽校が入っていません。横浜市として「来年度はこういうことをやってもらいたい」という方針であれば、個別取材のテーマとして森の楽校を入れる可能性はありますね。
(金井委員)	もちろん、そういうふうに考えています。

	(大竹部会長) せっかく委員にも若者がいますから、よいと思います。 (金井委員) 本来の業務外でボランティアになってしまうかもしれませんが、委員が営業をかけてもいいのかについて、事務局でご確認をお願いします。 (事務局) 分かりました。 (金井委員) 普通に考えれば、そんなに問題はないと思います。 (大竹部会長) 私も問題ない気がします。 (金井委員) ただし、いろいろ制約があるかもしれません。 (大竹部会長) 草の根活動はオンラインだけでは絶対に届かない部分がありますから、人海戦術も必要になると感じます。 (金井委員) 「横浜市の取組」と言えば、恐らく、話は聞いてもらえると思います。 (北原委員) 今年度と同じように、次回の部会で取材テーマをリストアップし、そのときに各委員の担当を決めるという形になりますか。 (大竹部会長) 今年度はそうでしたね。 先ほどの北原委員のご意見にもありましたが、横浜市が制作するコンテンツと同じ内容のものを取材してもよくないと思います。また、市が出しているものとは異なる、市民としての視点で出てきたテーマが面白いというお話もありましたが、私も確かにそのとおりでと思いました。 (北原委員) まず、チームだけを決め、そのメンバー内でテーマを出し合い、次回の部会で決めるようにすれば、話が早いと思います。自分だけで「こうじゃないだろうか」と考えるよりも、「実はこれはこうですよ」といった調整もしやすいのではないかと思います。 (大竹部会長) それでは、先にペアを決めておきますか。どのように決めましょうか。 (北原委員) このテーマが少し漠然とし過ぎていますね。 (大竹部会長) そうですね。 (河原委員) 「農と農」という組み合わせではなく、「森・農・緑」と別々のテーマに分かれたほうがいいのですか。 (大竹部会長) そうですね。「森・農・緑」という3つの柱があるので、その柱に付随するテーマを扱う形になると思います。詳細は次回決めるとして、まずは「森・農・緑」という大枠のテーマだけを決め、そのテーマごとに2人ずつチームになって、最終的にそのチームが取材をするという流れになるかもしれません。
--	---

	(北原委員) 少し分かりにくいのが、「共同取材２回」という部分です。「子育て世代向け」と「若者向け」に分けるのか、あるいは、両方の要素を含むのか、その辺りがはっきりしません。 (大竹部会長) 資料２の説明によると、事務局案は次のとおりです。 ● 農（子育て世代向け） ○ 収穫体験 ○ 農家さんの出張授業（学校との連携） ● 農（若者向け） ○ 「はまふうどコンシェルジュ」と大学生の連携取組 ● 緑（子育て世代向け） ○ 地域緑のまちづくりの取組 ● 緑（若者向け） ○ 地域緑のまちづくりに緑の観点で関わっている若者の取材 (北原委員) では、ここに挙がっている候補の中から、共同取材のテーマを選ぶということですか。 (大竹部会長) そうです。ただし、この事務局からご提案に対する委員からのフィードバックはもちろん可能です。金井委員から先ほど、「来年度も森の楽校を入れてはどうか」というご意見がありました。共同取材のテーマにするか、個別取材にテーマにするかは別にして、一つのフィードバックですね。 (金井委員) 差し支えなければ、入れていただいたほうがいいと思います。 (大竹部会長) そうですね。個別取材で「森・農・緑」のうち、どれをやりたいのかを決める感じですね。 (北原委員) 仮に柱２が「子育て世代向け」ならば、柱３は「若者向け」ということになりますか。 (大竹部会長) そういう形になるかもしれません。われわれは各部会に所属していますから、その所属先で振り分けという方法もあります。ただし、所属先の部会では、提案に対して意見を述べる程度のため、その振り分け方が適切かどうかは分かりません。しかし、それも一つの手ではあります。 (河原委員) 年に１回しか部会がないですからね。 (大竹部会長) そうです。部会には所属しているものの、年１回ですからね。または、各委員の興味・関心で振り分けという方法もありますが、いかがですか。 (北原委員) 北部・南部というエリアで分ける方法もありますね。 (大竹部会長) それでもいいですね。 (北原委員) 先にテーマを決め、あるテーマは中区、別のテーマは戸塚区、というようにバランスを取る方法もありますし、区単位ではなく、臨海部と内陸部といったくくりでもいいですね。
--	--

	(大竹部会長) その場合、各委員がお住まいの地域を担当するというやり方もありますね。
	(河原委員) 近所にも幾つかのテーマはあると思います。 やはり、「森・農・緑」の所属部会で分けたほうが早く決まりそうですね。
	(大竹部会長) そうですね。 今のご意見についてはいかがですか。私たちもせっかく各部会に所属しているので、その形で分けることも一つの手だと思います。皆さんが「どれでもいい」とおっしゃっている状況のため、その方向でいかがですか。
	(飛田委員) 「森」は共同取材には入っていないため、共同取材は振り分けてください。
	(大竹部会長) 柱1ですね。 共同取材は委員全員が行いますので、その方向にしましょうか。
	(北原委員) そうですね。
	(大竹部会長) それでは、個別取材は、所属する部会の柱を担当する形でお願いします。 次に、共同取材の記事テーマについてお伺いします。来年度は「農」と「緑」を取り上げる予定です。資料のテーマ案をご覧の上、この場で追加のご意見やご質問があればお願いします。 例えば、「次回部会までにこういう情報を事務局で調べておいてほしい」など、何かありましたらお願いします。
	(北原委員) 「緑」の記事テーマに、「大学生」、「子どもたちの身近な緑を地域でつくる」などとありますが、具体的には「地域緑のまちづくり」のようですね。例えば、青葉台の郵便局の上でやっている養蜂と、青葉台小学校の子どもたちとの関わりといったイメージではないかと思います。一方、「地域づくりで活躍する大学生」の具体イメージはどちらでしょうか。
	(事務局) 資料でご紹介しているのは中川西地区です。
	(北原委員) ありがとうございます。昨年調査部会で行ったところ、東京都市大学の学生さんの取組ですね。
	(飛田委員) 事務局としてどのエリアを取材したいというご希望はありますか。
	(事務局) 事務局としては、「取り組み、できれば取材箇所もまんべんなく」が理想です。ただし、時期や取材対象によっては縛るものではなく、理想としてはバランス良くしてもらえるとよいと考えています。
	(金井委員) 話の流れに逆らうわけではないのですが、一言申し上げます。 私は、「みどりアップ計画」は認知度が非常に低いように思います。認知度をどう上げていくのかという議論をもう少し

	深めないと、このまま5年間続けても効果が出ないのではないかと危惧しています。生意気なことを言って申し訳ないです。 このメンバーで議論するのはよいのですが、あらかじめ事務局から、「こことあそこをやりますから、よろしく」と言われても、そこに明確な根拠があるように私には感じられません。その根拠の部分で、私が理解できていないだけかもしれません。 今回も、「まんべんなくお願いします」と言われて、「次回部会ではこれ」といった感じで議事設定され、時間を使っているのに議論が深まっていないと感じます。そのため、常にもどかしさがあり、また、「お仕着せのテーマで議論している」感じがぬぐえません。皆さんはそう思いませんか。
(北原委員)	それでは、一つ、具体的な提案をしてもよいですか。 まず、私は、取材を最大のアウトリーチの機会だと考えています。しかし、昨年、私が「人生記念樹」の取材をした際には、個人情報の取り扱いの観点から、取材した方にすら「記事が公開されたことを知らせる手段」が用意されていませんでした。 取材相手から、「いつ公開されますか」と聞かれても、「はっきり言えません」としか言えず、さらに、「公開されたらどうやって知らせてもらえますか」と尋ねられても、「個人情報の扱いから難しいです」としか言えませんでした。このように、取材相手に記事公開を伝えるルートが設計されていないのです。 そこで、私は、「写真掲載の承諾を得る際に、その場で『みどりアップ計画のメルマガ』に登録していただく仕組みを作る」という具体的な提案をいたします。 例えば、A5用紙に二次元コードを載せて、「記事の公開時にメルマガでお知らせしますので、この場で登録してください」と案内すれば、取材相手が自らの意思で登録できます。それによって、取材相手の方は確実にみどりアップの情報を知っていただけますし、メルマガの登録者数も確実に増えることになります。
(大竹部会長)	他に何か、ご意見はありますか。 「若者」、「子育て世代」、「学校」というキーワードは、この部会のメンバーから毎回出てきます。みどりアップ計画の認知度を高めるには、「子育て世代」と「若者」にもっとリーチが必要なため、大学も含めた学校に広げたいという思いを各委員はお持ちだと感じています。そのために、できれば共同取材記事、個別取材記事の両方に、「若者」や「学校」という視点を入れたいと考えます。 そこで、「私たちの思いを実現するにはどうすればよいか」について、事務局から、「それならば、こういうテーマはいかがですか」とご提案くださると、次回の部会で話が進めやすくなると思います。ご検討をよろしくお願いいたします。 他にはいかがですか。
(河原委員)	「学校」の視点は、私もどうしても入れたいと考えます。一口に「学校」といっても、小学校での取組は多いのですが、大学もやっているとはいえ取り組みは少ないし、また、中学校での取組についてはみどりアップ計画には全く入っていないように思います。

	従って、この機会に小学校、中学校、高校、大学とそれぞれの「学校」、そこで学ぶ生徒・学生たちに向けた取組にはどのようなものがあるのかが分かるとうれしいです。また、中学生はあっという間に大学生になるため、中学生のうちから関わりをつくっておくと、より広がっていくと思います。 一例として食育を考えてみると、小学校ではやっていて、高校では少し入っている学校もありますが、中学校だけがはっきり抜けているという印象です。中学校では「ハマ弁」も始まったため、地産地消のハマ弁について取り組んでいることがあれば、ぜひ、取材してみたいと思っています。 どう広がっているのかは全く分からないのですが、「食 × 農 × 学生」というテーマで取材すれば面白いのではないかと、個人的には思っています。
(飛田委員)	取材とは直接関係はないのですが、「北の森」、「南の森」と分けてしまうと、境川沿いの地域が抜けてしまうと思われます。実はあの辺には、神奈川県外国人の住民支援の対象となる方々が多く住んでいます。みどりアップ計画について発信するというのであれば、ベトナムや中国などから来た方々の認知度を調べたり、みどりアップ計画を紹介したりすることもよいのではないかと思います。 例えば、ベトナム出身のご家庭ではベトナム野菜を入手するために家庭菜園で育てているといった話をよくお聞きします。もし、そうした情報を事務局がお持ちであれば、来年度の取材テーマとして扱ってもよいかもしれません。 また、私は英語のブログをやっているのですが、私の記事で圧倒的にアクセスを伸ばしている記事は南の森のハイキングコースを紹介した記事です。最終的には鎌倉に降りていくコースです。こうした記事を見る人は観光客が多いと思います。そうした観光客や東京在住の方が日帰りでハイキングに来たり、最近外国の方が新治にも多く来たりしています。そういう人たちが横浜の森を「いいね」と言ってくれているならば、観光関連の部署と連携して情報を集め、記事として発信するといった方向もあるのではないかと思います。 山下公園のバラもきれいですが、私の周りの友人に聞くと、横浜の魅力として、東京にはない部分をアピールできると思いますので、そうした視点で記事を書ければうれしいです。
(大竹部会長)	ありがとうございます。さまざまなご意見を頂戴し、盛りだくさんではありますが、事務局でご検討いただき、次回、5月には具体的な形にしたいと思います。 それでは次第1は以上とし、きょうはここで終了します。最後に「事務連絡」として、事務局の皆さん、よろしくお願いします。
	(事務局説明)
(金井委員)	一つよろしいですか。私の理解不足かもしれませんが、最初の会議では、横浜市から「若者の認知度が低い」という話がありました。そのとき、「どのような調査をしたのですか」と尋ねたところ、少し歯切れが悪い印象でした。私の方からこれまでもさまざまな会議で同様の質問をしてきました。すると、全体会議で、「調査は年に1回、無作為抽出した4000～5000世帯に文書を送り、回答してもらっています」という

	説明がありました。 ここからは半分私の推測になりますので、間違っていたらご指摘ください。恐らく、この認知度調査に回答するのは70代、80代の方が中心なのではないでしょうか。つまり、若い世代からの返事が来ないため、「若者の認知度が低い」という安易な結論になっているのではないかと思います。 もちろん、若者の認知度が高いとは思いますが、「本当に低いのか」を裏付ける確固たるデータがあるのかといった点には疑問が残ります。 年1回の郵送調査とは別に、年に3回くらい、簡単でもいいので5問程度のオンライン調査をしなければ、市民にどこまで届いているのかについて本当のところが分からないと思うのです。 根本的な問題から目をそらしたままでは、いくらここで議論をしても、認知度は上がらないと思います。 とにかく、意識調査のやり方を見直さないと根本的な問題解決にならないと強く感じています。 (事務局) 検証し、問題点は改善していきたいと思います。 本日は本当に多くのご意見をありがとうございました。 「相利関係」というお話もありましたが、いろいろな情報のやり取りができる関係づくりを私たちも進めていきますので、委員の皆さまも、広報へのご協力を引き続き、よろしくお願いします。 これをもちまして、第61回広報・見える化部会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。 (一同) ありがとうございました。
資 料 ・ 特記事項	次第 資料1 市民目線での情報提供のあり方について